

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 9 月 11 日 9:34AM 更新

[日経平均・TOPIX]

【当面の想定レンジ】(日経平均) 49,500～70,000 円
(TOPIX) 3400～4250

[NY ダウ・S&P500]

【当面の想定レンジ】(NY ダウ) 45,000～54,700 ドル
(S&P500) 6300～7800

[ナスダック 100]

【当面の想定レンジ】(ナスダック 100) 23,500～30,650
(ナスダック総合) 20,700～27,000

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 140.000～161.000 円

[ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 98.000～102.720

エリオット波動とは

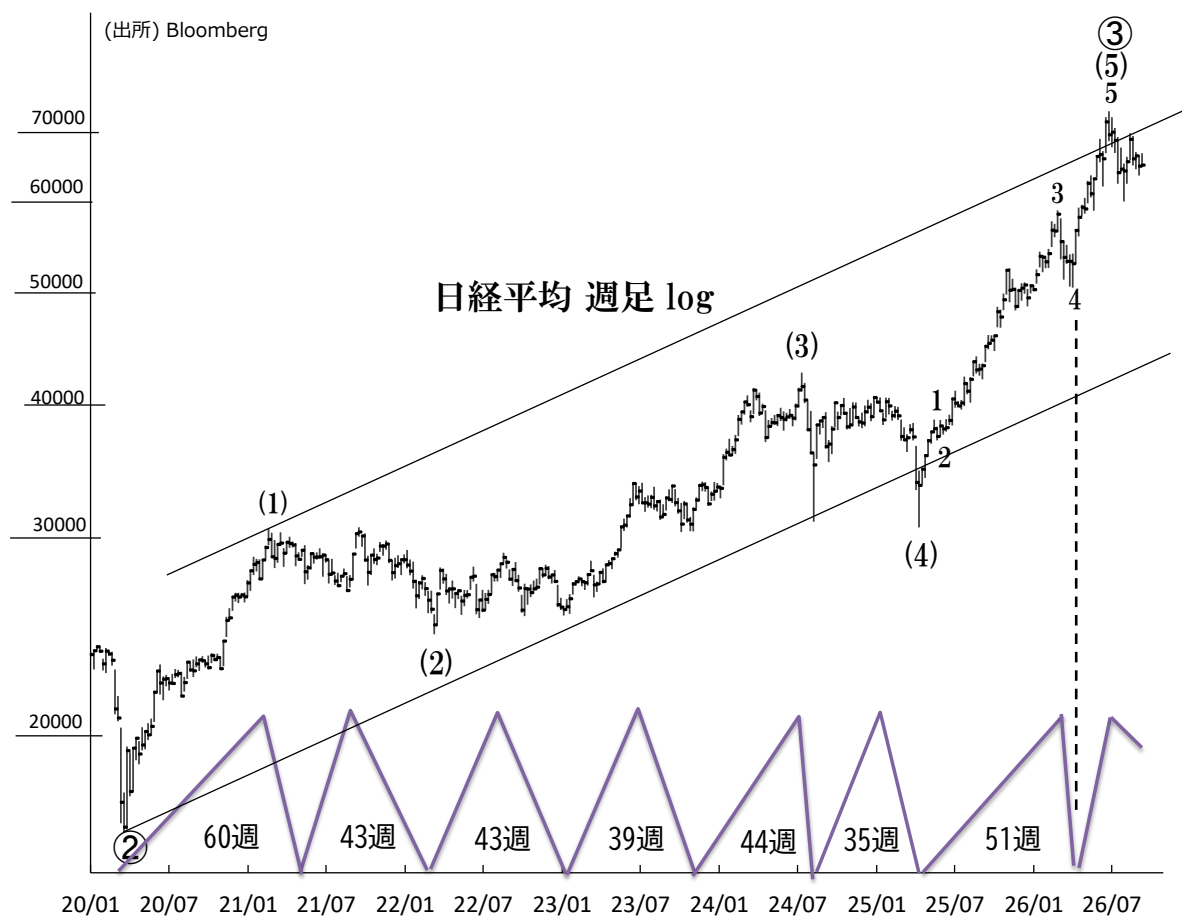
株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は 5 つの上昇波と 3 つの下降波（合計 8 つの波）で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均・TOPIX



【週足 エリオット波動分析】

72,831 円(6/22 高値)以来、プライマリー第④波の弱気相場が進行中とみています。

3 月末(50,558 円)から始まった現行週次サイクルは、弱気相場に特有の「レフト・トランスレーション(右肩下がり)」になる公算が大きいでしょう(上昇期間よりも下げ期間が長くなります)。

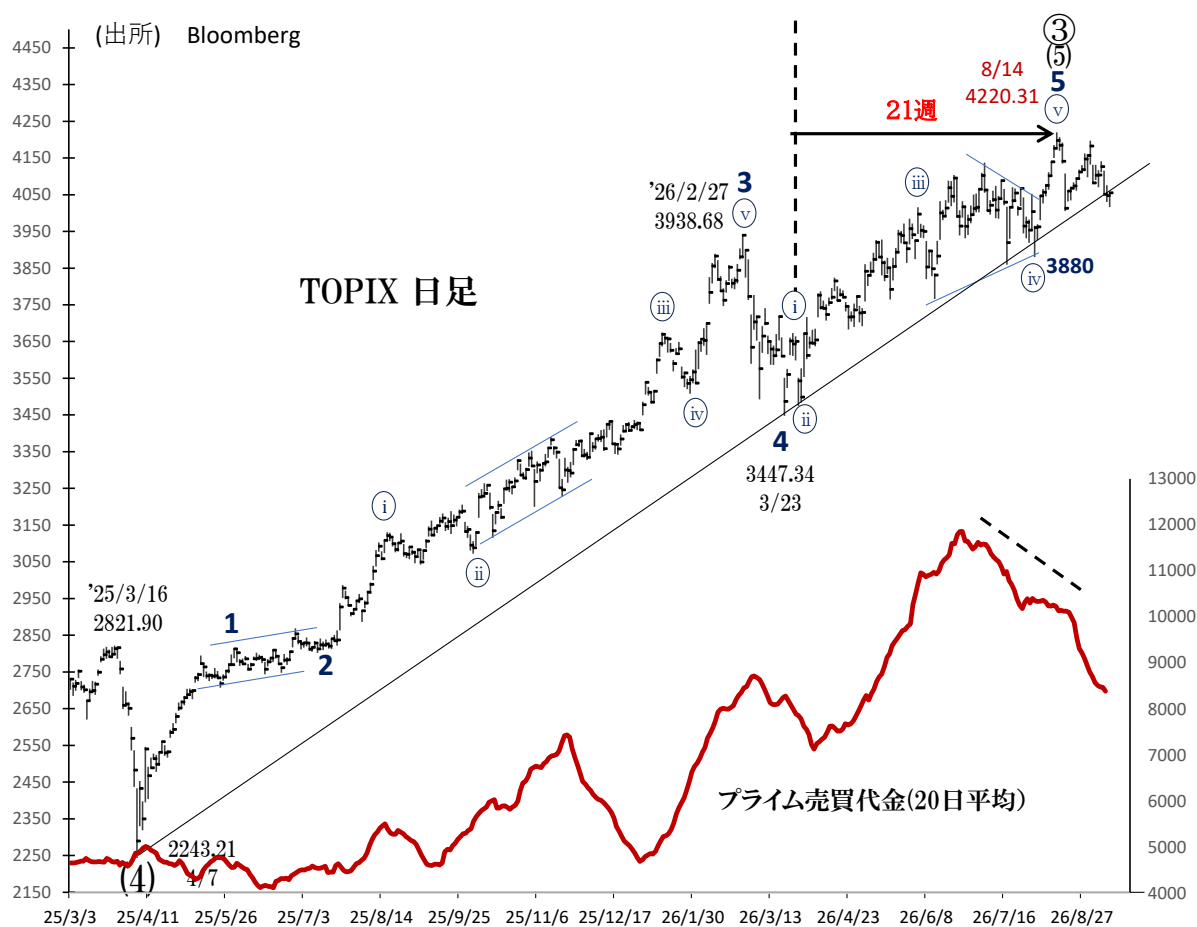
現行サイクルの上昇期間はフィボナッチ 13 週(両端入れ)の長さでした。サイクル全体が 37 週～53 週(※1)ということから、6 月 22 日(サイクルトップ)からの通算下げ期間は、24 週～40 週(5 カ月～8 カ月)と推定されます。

換言すると、日経平均は今年 11 月～来年 3 月まで下値模索の展開が続くと予想されます。

「レフト・トランスレーション」のパターンでは、サイクル終点の安値がサイクル始点安値を通常は下回ります。つまり、少なくとも 50,558 円を下回るまで(※2)現行週次サイクルは終わらないでしょう。

(※1)週次サイクル期間(2020 年以降の補正後)は 45 週±8 週(37 週～53 週)。

(※2)サイクルの高値から安値まで、下げ率は 10%～26%(平均 17%)。今サイクル安値が 50,558 円未満であると仮定すると、現行サイクルの下げ率は 30%を超えることになる。



[TOPIX]

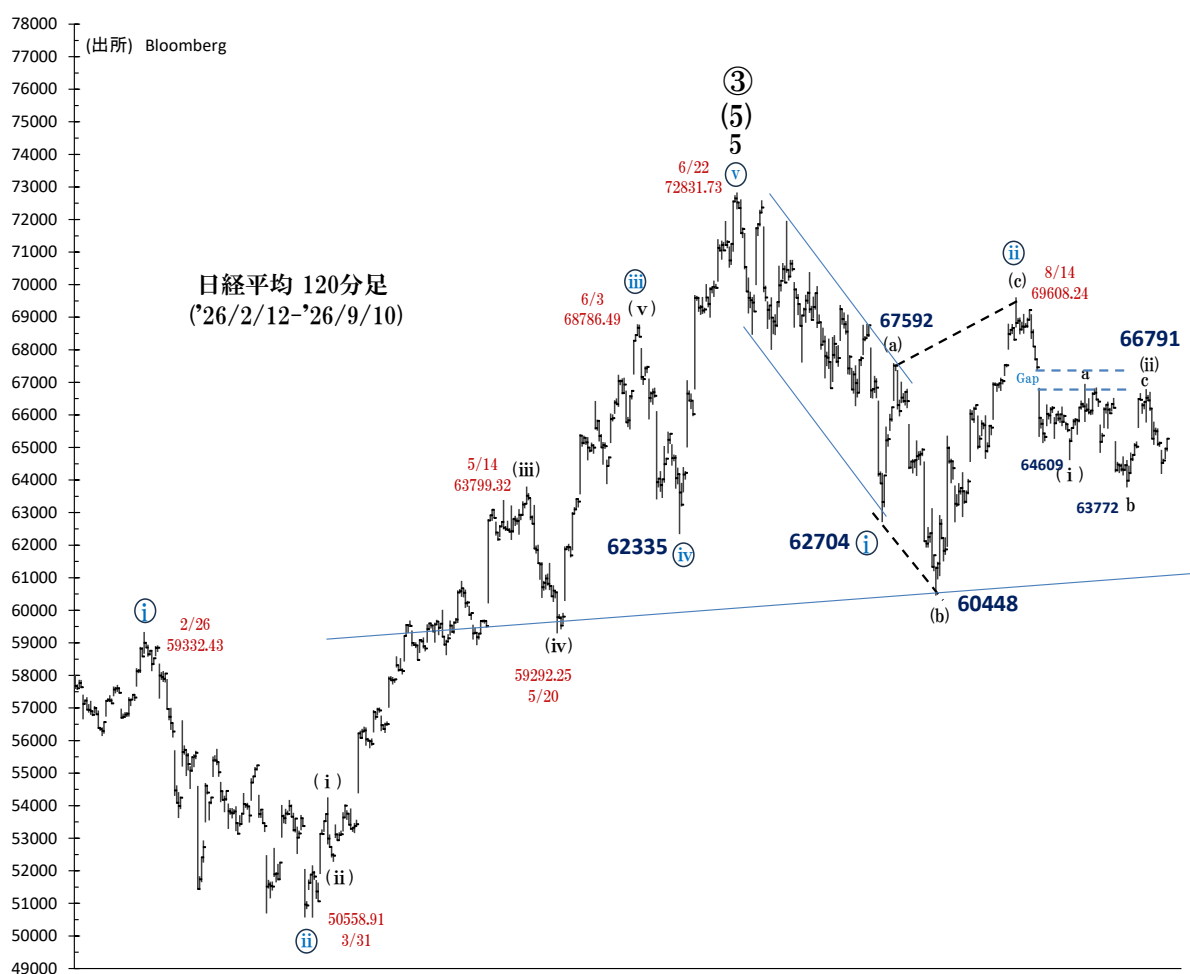
日経平均のプライマリー③波のピークは6月22日ですが、そこからTOPIXはおおよそ2カ月遅れ、8月14日に付けました。3月末からの週次サイクルでは、日経平均は高値までに13週かかりました。それに遅れてTOPIXは8月第2週にトップアウトし、3月安値から21週かかりました。いずれもフィボナッチ数を反映しています。

市場ボリューム(株価の先行指標)をみると、プライム市場の売買代金(20日平均)はTOPIX高値の2カ月前にトップアウトしており、重要な天井を付けたことが示唆されています。

4016(9/10 安値)を終値で下回ると、25年4月からのサポートラインからの下放れが確認されます。さらに4005(8/19 安値)をザラバで下回ると、次は3880(8/3 安値)を早々に目指す可能性があります。

8月天井からプライマリー④波による調整が始まったとみられます。その調整規模は、プライマリー第②波(2018年1月～20年3月)の下げ率(37.2%)と同等か、それ以上の大きさになると思われます。

それでも予想される日経平均の下落スケールよりは、比較的浅めのものになると思われます。



[日経平均・120分足]

69,608 円(8/14 高値)からマル iii 波の下落が進行中とみられます。

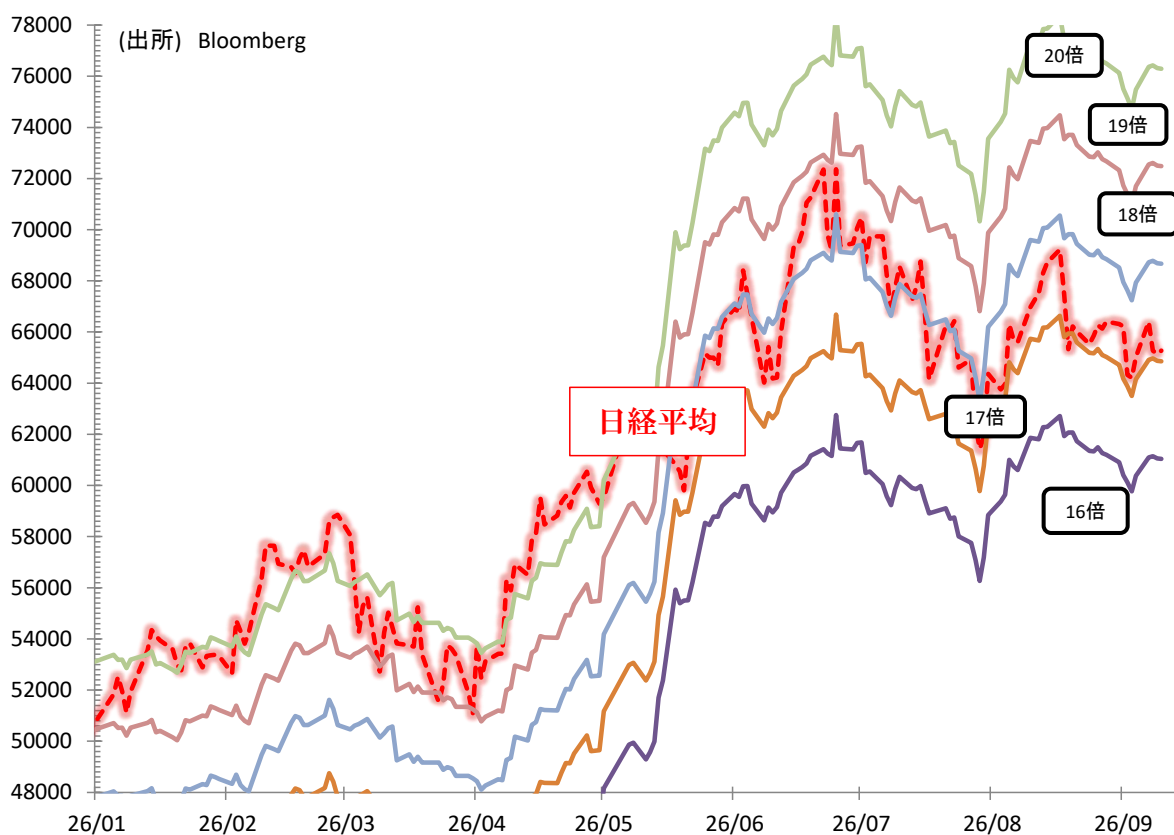
64,609 円(8/25 安値)からは、メヌエット級第(ii)波です。それは「フラット」となり、66,791 円(9/8 高値)を以て完了したようです。

だとすると、66,791 円からは第(iii)による下落トレンドが進行中ということになります。この見方は 63,772 円(9/3 安値)を割ると強化され、次は 60,448 円(7/29 安値)へ下押しとなるでしょう。

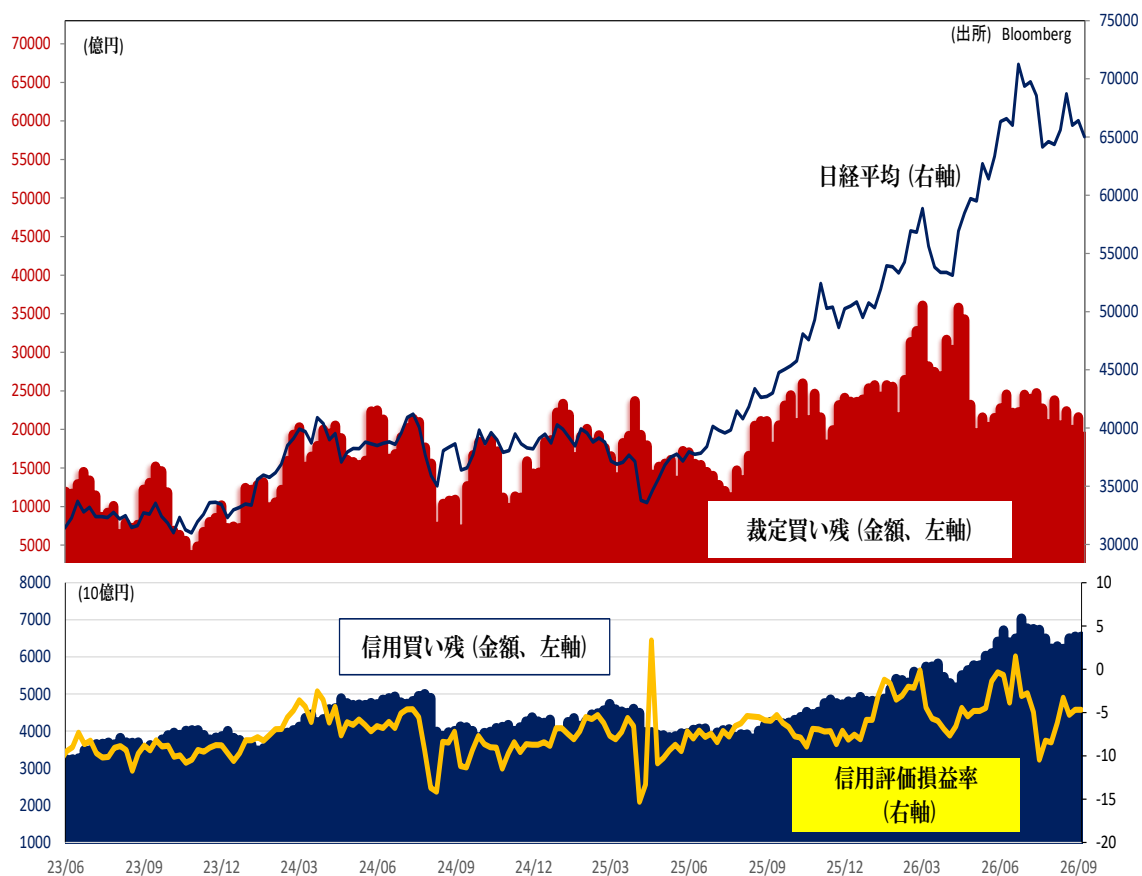
マル iii 波の長さは通常、マル i 波の等倍-1.618 倍になります。これによると、マル iii 波の想定下値レンジとして[59,481 円-53,222 円]が導かれます。

[予想 PER 別の日経平均水準]

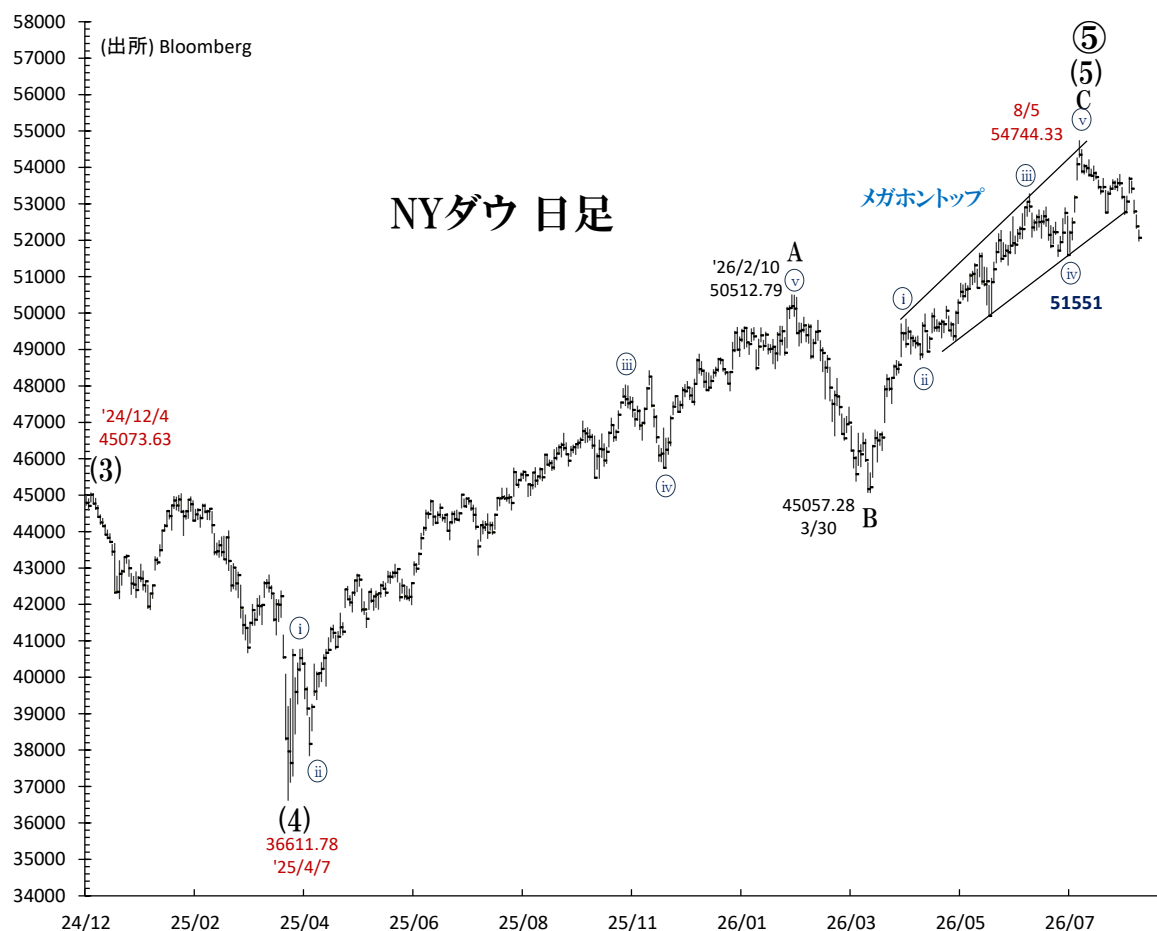
9 月 10 日の日経平均予想 PER は 17.11 倍、予想 EPS は 3814 円。過去最高の予想 EPS は 3922 円(6/25)です。



[裁定買い残と信用買い残] (9月4日時点)



NY ダウ・S&P500



【NY ダウ 30 日足 エリオット波動分析】

ナスダック総合指数は6月1日に、ナスダック100は6月3日に、各々ザラバの最高値を記録しました。やや遅れて6月22日にはSOX指数が最高値を付け、7月末にかけて一時28%下落しました。

ダウ輸送株が最高値を記録したのは4月22日のことで、ダウ30は8月5日、S&P500は8月13日に各々、最高値を記録しています。これら指数の高値時期が異なる「未確認」パターンは、米株全体が天井圏にあることを示唆しています。

NYダウは4月下旬からの「メガホントップ」の天井パターンを、8月5日の高値(54,744ドル)を以て完成しました。足元、同パターンの下限を明確に下回り弱気トリガーが発動しています。短期的にも51,500ドルを試すでしょう。

51,500ドルを下回ると、51,046ドル(3月からの上昇の38.2%戻し水準)が射程圏です。



【S&P500 日足 エリオット波動分析】

7816(8/13 高値)を以て、25 年 4 月安値(4835)以来の一連の 5 波動構成は、すべて完了したとみられます。この見方通りなら、今後の下落リスクは—おそらく一般に思われている以上に—高いでしょう。

9 月 10 日は一時 7580 まで下げました。終値でも注目レベルの 7611(9/1 安値)を下回りました。来週から下げ基調が加速する可能性があります。

NY 原油先物が 100ドル乗せ

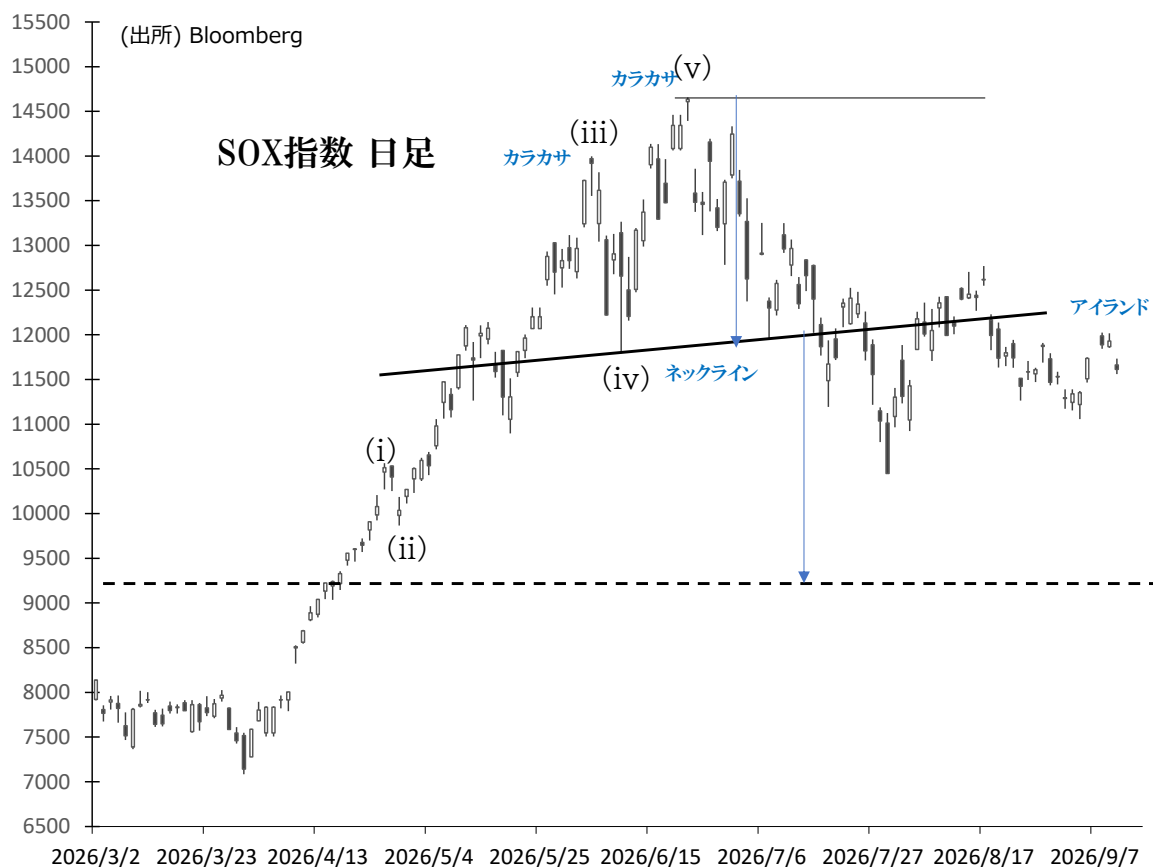
9 月 10 日、NY 原油先物がおよそ 3 カ月半ぶりに 100ドル台を回復しました。これは想定通りの動き(※)であり、今後も上昇基調は継続すると思われます。原油高に伴うインフレの進展は、「スタグフレーション」懸念をより強め、株安を招くものになるでしょう。

※原油のチャート分析は、マンスリー・フォーカス(注目通貨アップデート)に掲載中です

SOX 指数

今後の下落リスクは高く、9月～10月に9000-9500へ下振れる可能性があります。

9月10日はマドを空けて下げました。このマドは「アイランド・ギャップ」とみられ、先週からの戻り完了を暗示しています。



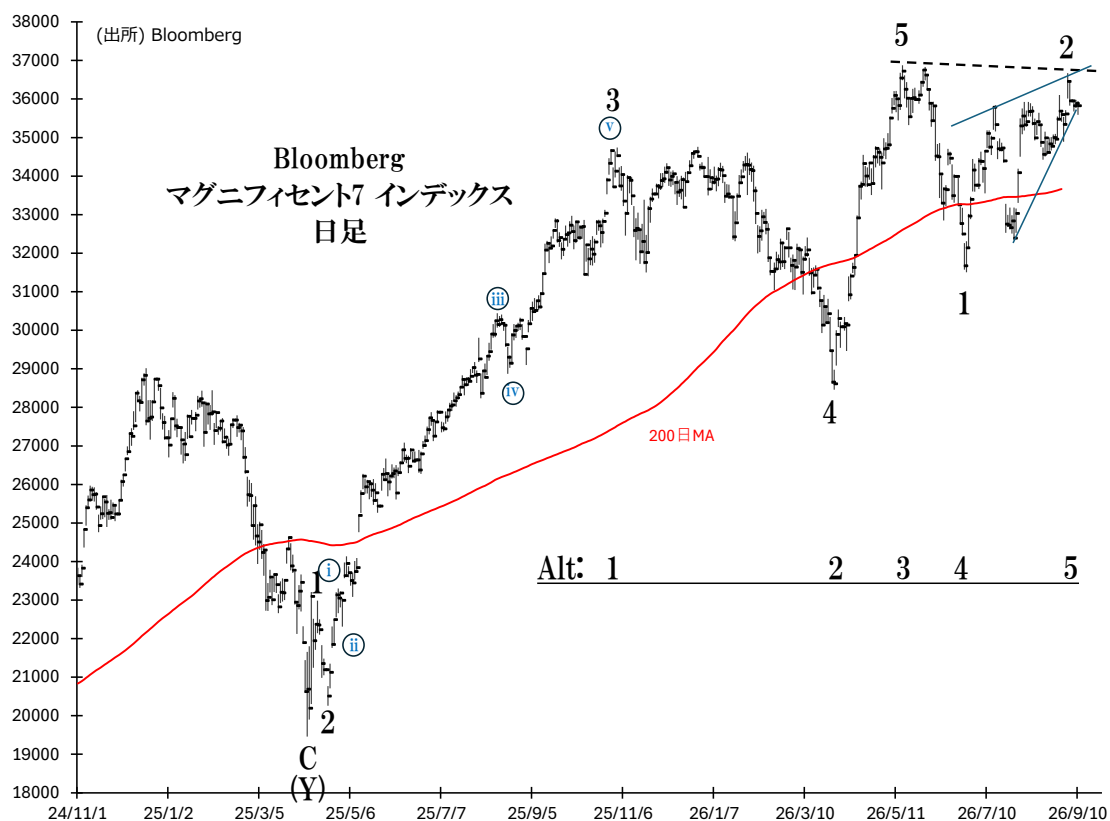
Bloomberg マグニフィセント7 インデックス

マグ7は5月14日に最高値を付けており、他の主要指数に先行して高値を付けました。これは重要な天井パターン(未確認)です。

直近高値は5月の高値に近く、このまま「ダブル・トップ」を形成する可能性があります。

7月下旬からの上昇ウェッジは、上昇から反落への急転が近いことを示唆しています。

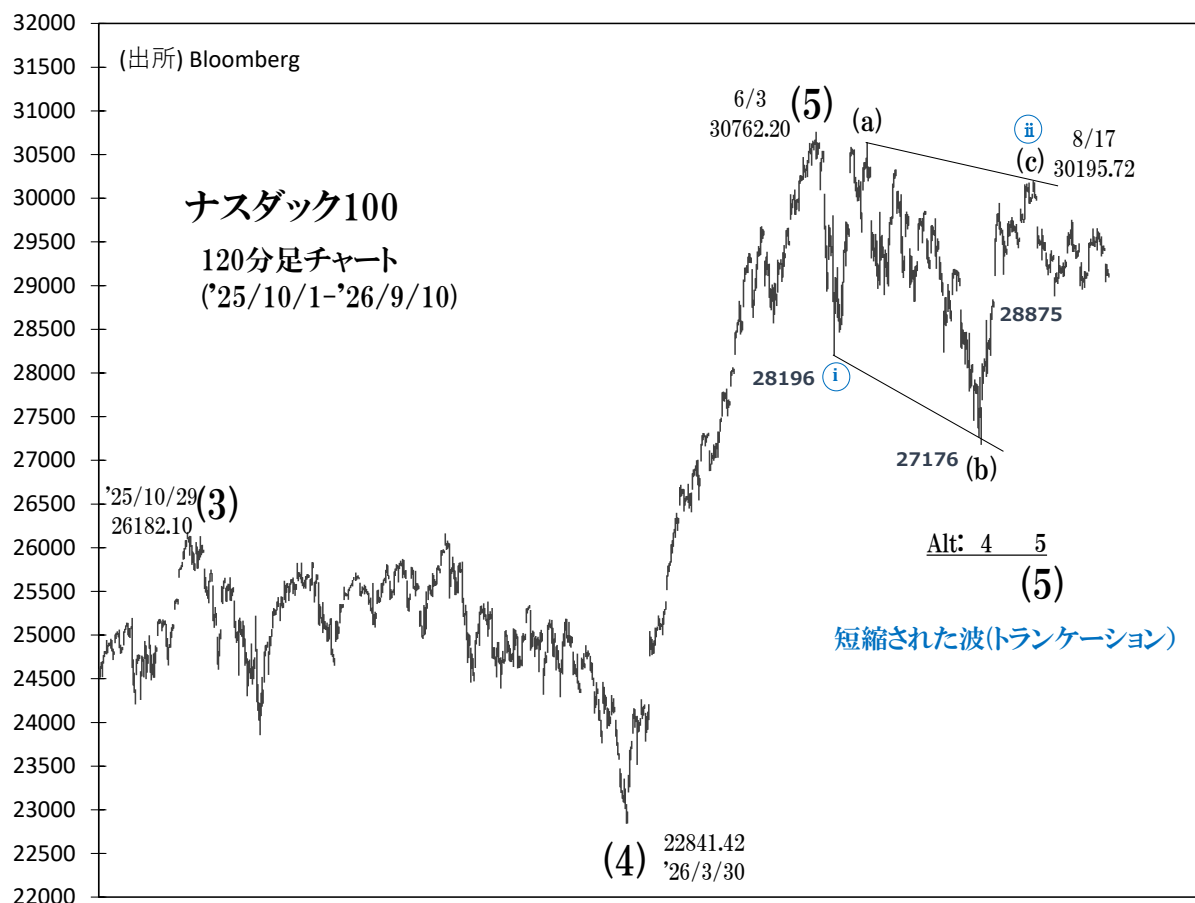
一方、高値を更新する場合には波動カウントを改めます。この場合、6月下旬からの上昇は第5波による上昇と読み換えられます(チャート上でAltと表示)。



[ダウ輸送株平均]



ナスダック 100



【ナスダック 100 時間足 エリオット波動分析】

28,196(6/9 安値)からのマル ii 波(ランニング・フラット)は、30,195(8/17 高値)で終わったと思われます。そこからマル iii 波による下落が開始された可能性があり、それは今後 27,176(7/30 安値)を大きく下回る、強い下降波になるでしょう。28,875 を割ると、マル iii 波入りとの見方がさらに強化されます。

なお、以下の代替カウントも現行カウントと同列に捉えています。

(オルタナティブカウント、Alt)

27,176 からの第 5 波による上昇は、30,195(8/17 高値)を以て完了したとみられます。

第 5 波は 6 月高値を上回ることができない、トランケーション[truncation/切り捨て、短縮]です。

トランケーション(※)は、6 月から 7 月までのナスダック 100 の下げが大き過ぎたことに起因しています。潜在的な下落圧力が非常に強いために、高値更新に必要とされる第 5 波の出力が不足したと考えられます。

(※)旧呼称は「フェイラー、失敗」

米ドル/円



【月足・エリオット波動分析】

日米実質金利差から導かれる米ドル/円の水準は、現在 1ドル=140 円台前半です。日本円は 1 年以上も、金利差からの妥当な水準より、極端に過小評価された状態に置かれてきました。

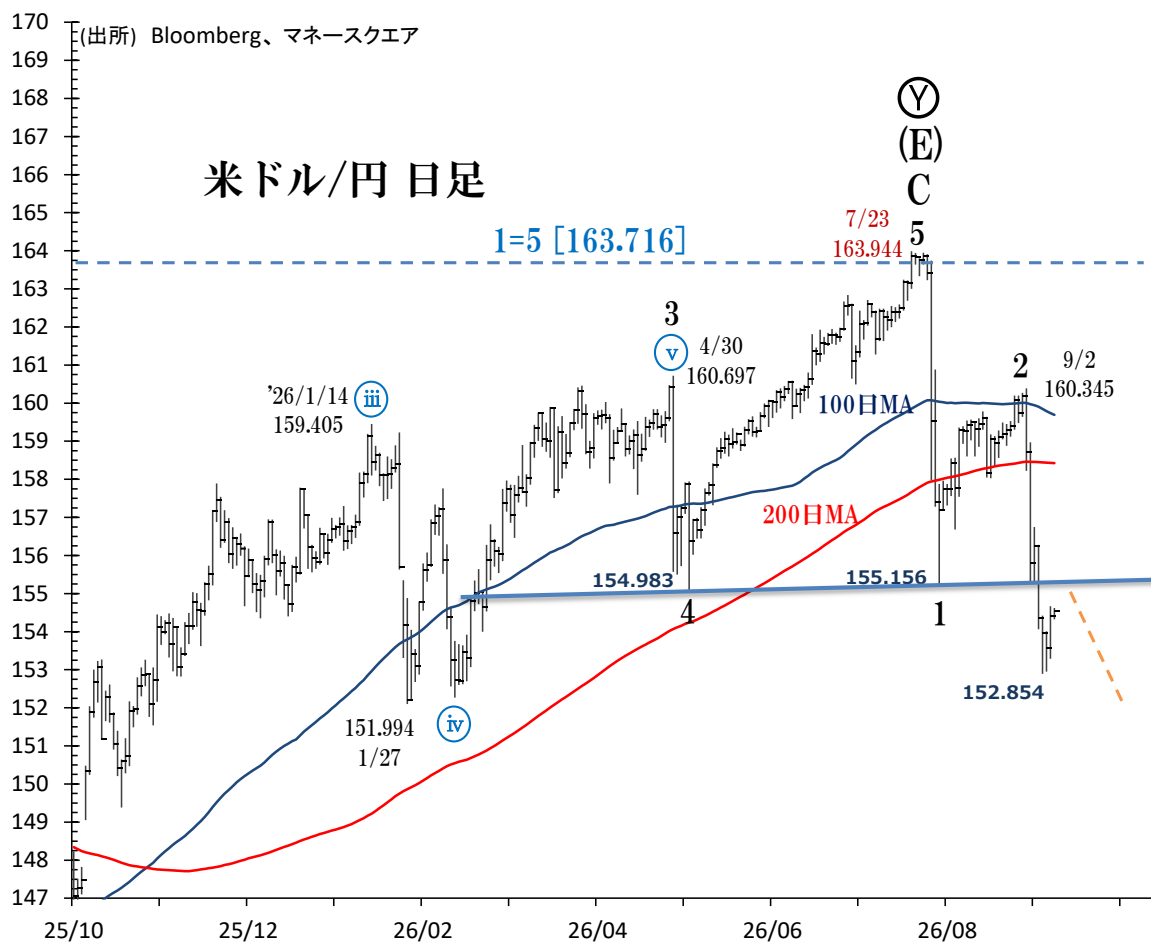
また、購買力平価からの妥当な円相場は OECD 算出の GDP ベースで 1ドル=97 円～103 円です。長期的にも日本円は著しい過小評価が続いています。

163.944 円(7/23)を以て通算 5 年間の円安Y波[ウェッジ]は完了した、とみられます。なおウェッジ内の副次波は、相互に美しい比率を示しています。すなわち(C)波の長さは(A)波の 0.703 倍であり、(E)波の長さは(C)波に対し、同じく 0.703 倍となっていました。

この先は数年間にわたる円高になるでしょう。上記のように、長らく日本円はその実力に比べ過小評価されてきましたが、今後は実力に見合った適正な水準が模索されていくと思われます。

7 月末の日米協調円買い介入は、円安の限界水準(160 円台前半)を明示しており、もはや積極的な円売りの動機は失われたといえます。今後は次第に円高傾向が強まっていくでしょう。

筆者は今後数年内(2028 年?)に、1ドル=120 円-125 円を付けてもおかしくない、とみています。それは歴史的なレンジ[80 円-160 円]の中値に相当し、かつて「黒田シーリング」と言われた水準でもあります。



【日足 エリオット波動分析】

9月8日には一時 152.854 円と7カ月ぶり円高水準となりました。

過去半年の「ヘッド・アンド・ショルダーズ」のネックラインから下放れが始まっており、基調はドル安・円高です。

足元でみられるリバウンドの試みは、ネックラインの 155 円処で抵抗を受けるでしょう。

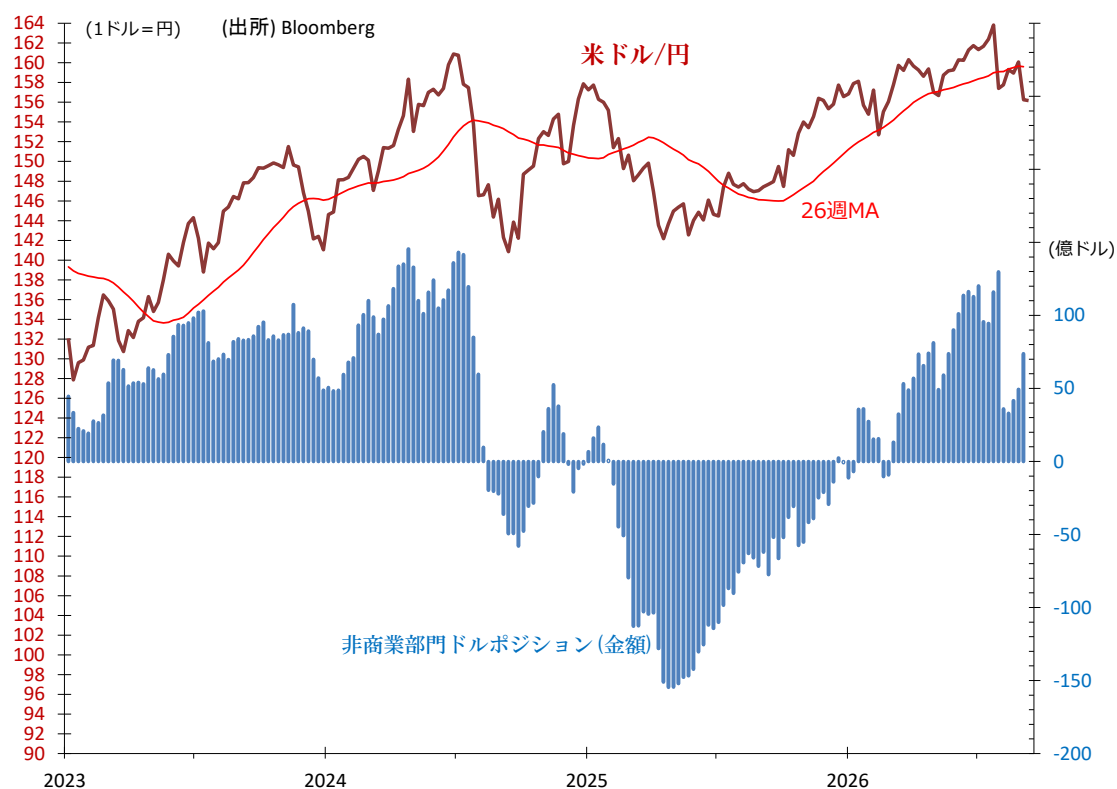
遠からず 152 円処を試す展開がありそうです。152 円処というのは、25 年 4 月(139.577 円)からのドル/円上昇の半値戻り[151.910 円]に相当し、今年 1 月 27 日に付けた 151.994 円でもあります。さらにこの付近は、7 月からの第 1 波と 9 月からの第 3 波が等しく下がる、N 値水準[151.557 円]です。

心理的節目の 150 円も視野に入り、その直下には 61.8%戻り水準[149.070 円]が控えています。もっとも 150 円処は、一時的なサポートに過ぎないでしょう。

ヘッド・アンド・ショルダーズからの垂直計算に基づくターゲットは「145 円-146 円」です。

金利差からのドル/円推計値

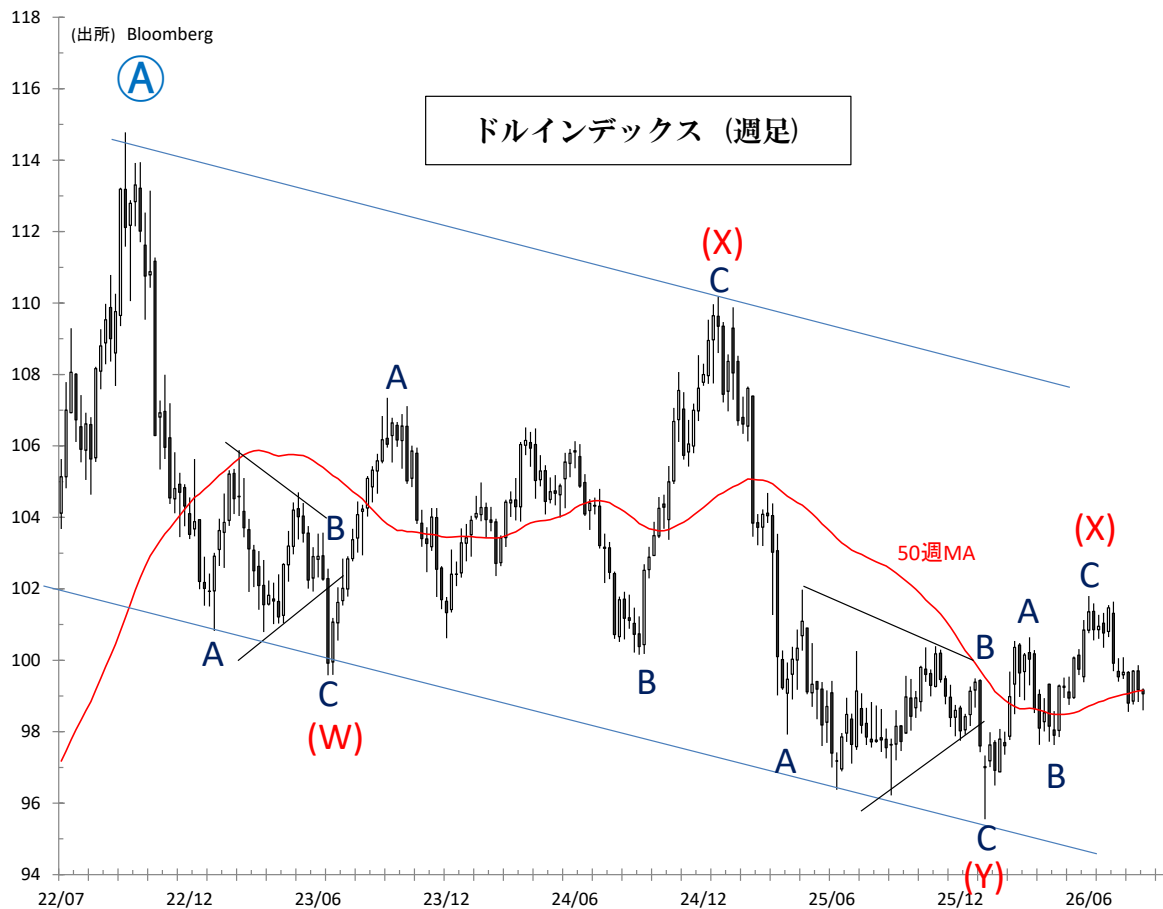
足元、日米実質金利差からのドル/円推計値は[143.644 円]です。



円売り持ちは3週続けて拡大 (2026年9月1日時点)

IMM 通貨先物市場での投机筋(非商業部門)の円売り持ち高は、前週の49.42億ドルから73.8億ドルへ3週続けて拡大しました。

ドルインデックス (ドル指数)



【エリオット波動分析】

22 年 9 月高値からのドル安③波は、「トリプル・ジグザグ(W)-(X)-(Y)-(X)-(Z)」のコースを辿っています。長期タームの見通しは引き続きドル安です。

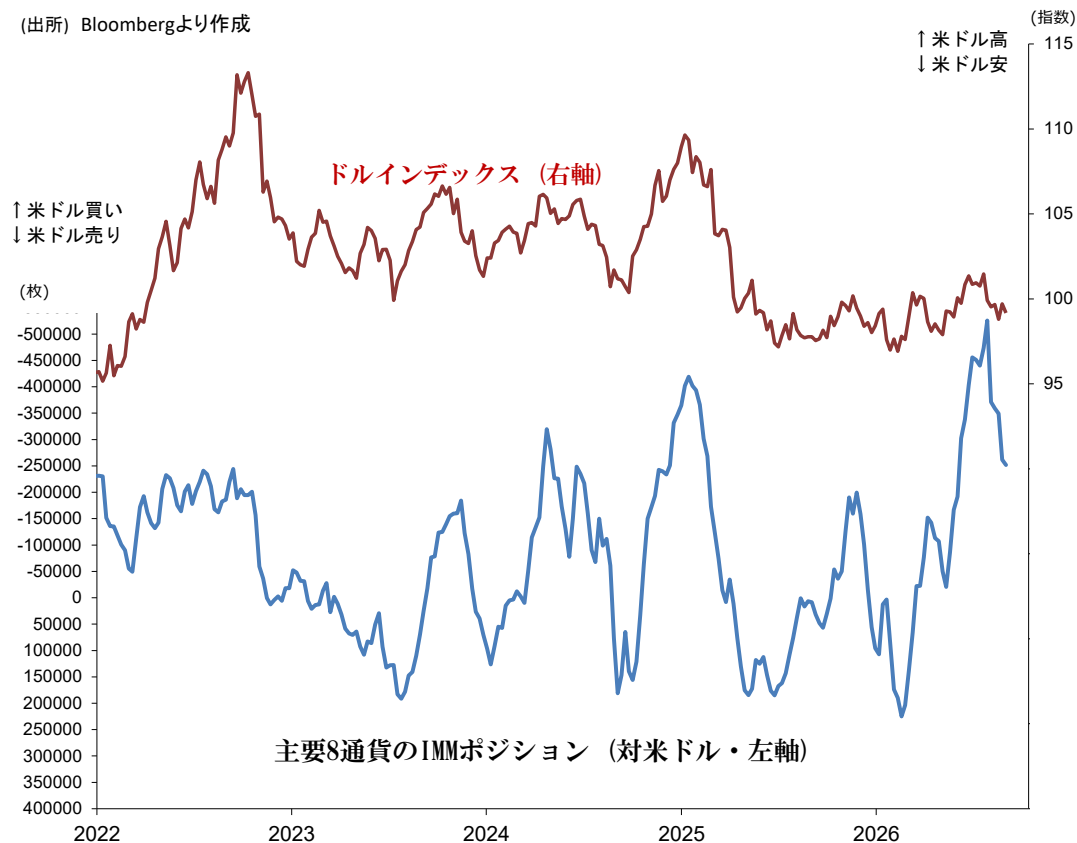
今年 1 月安値からの③波-(X)波による戻りは 101.800(6/24)で完成し、持続的なドル安トレンドが進行中と思われます。

今年 8 月は、7 カ月間にわたるサポートラインを明確に下回りました。旧サポートラインは、98.557(8/20)からのリバウンド(マル ii 波)にとって重いレジスタンスになるでしょう(実際そうなっています)。

98.557 を割るとマル iii 波によるドル安入りの合図となり、次は 97.625(5/6)を試す展開となるでしょう。

投機筋のドル合成ポジション買い持ち高は 5 週連続で縮小(2026 年 9 月 1 日時点)

投機筋によるドル合成ポジション買い持ち枚数は、25 万 1926 枚と前週の 26 万 1954 枚から縮小しました。縮小は 5 週連続です。



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できると思われる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもありますが、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差（スプレッド）があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4% 以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率（為替リスク想定比率）を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率（為替リスク想定比率）は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10% です。

金融商品取引業 関東財務局長（金商）第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア